

シリーズ
「私の森語り」
もりかた

森林・林業との関わりの中で、
様々な課題に挑戦されている方
の取組を紹介します。

「地域とともに挑む森林保全と
鳥獣害対策」

鳥獣害対策」



NPO法人 愛猟
代表 鈴木 康弘

■自己紹介

農林業への被害が深刻化する中、猟師たちが集まり、鳥獣害対策を目的として六年前にNPO法人愛猟は設立されました。

私たちは農業者であり、猟師でもあります。鳥獣被害を肌で感じ、山に分け入る者として、「自分たちができることは何か」を考えながら活動をしています。

■活動内容

私たちは狩猟者育成事業、親子狩猟体験、女性狩猟体験、狩猟免許の取得方法や動物の解体講座などを行ってきました。また、地域

から活動資金をいただき、鳥獣被害の実態やその仕組み、対策に関する啓蒙活動を行い、小中学校でも出前授業を実施してきました。最近では自治体や協議会、農協などと連携した取り組みも展開しています。ジビエ普及のためのイベント出店も行っています。

鳥獣害対策の手法は「入れない」「寄せない」「捕獲する」という、いわゆる「鳥獣害対策の三本柱」が確立されています。入れないは「侵入防衛」、寄せないは「環境整備」、捕獲するは「加害獣の捕獲」を指します。しかし、鳥獣被害は依然として減少していません。特に森林・林業分野におけるシカの被害は深刻で、森林の多面的な機能が失わ



小学生への出前授業の一コマ



直近に開催した
鳥獣害フォーラム

れつつあります。シカの被害は森林被害の七〇割に及び、下層植物の食害による土砂災害、生物多様性の喪失など、様々な影響を引き起こします。これらの問題が与える影響は深刻です。

問題の大きな原因は「鳥獣害対策の三本柱」が十分に機能していないことです。少子高齢化により、侵入防衛や環境整備を行う人手は不足し、逆に集落が減少することで動物の生息域が拡大して被害は増える一方。また、動物を捕獲する猟友会も高齢化が進み、従来の猟友会頼みの体制では限界があります。

そこで、これからの森林整備は「ネイチャーポジティブ」の考え方を取り入れ、生物多様性と生態系の再生を目指す必要があります。鳥獣害対策の視点からもこれは重要であり、私たちもこの考えに基

づいて活動をより一層進めていきます。

■メッセージ

鳥獣害対策は「みんなで行えば解決できる」と言われ、地域ぐるみで取り組むことが重要です。地域ぐるみの活動とは国、県、市町村、研究機関などが連携し、住民と一体となつて行うことを意味します。人口減少が進む中、より少ない人数で効率的にできる作業を地域ぐるみで行う必要があります。私たちはそういった、より実践的な提案をこれからも発信し続けたいです。

■連絡先

豊田市高岡町西川前六四番地七
NPO法人愛猟
<https://airyo.org/>



コードはこちら↓